

今年で4回目となる、「こもろ・日盛俳句祭」。おかげさまで、年々全国各地から参加される皆様の数は増え、たくさんの異なる俳句に対する世界観が集まり、質の高い俳句が詠まれることとなつていて。わたしたちは今年度もボランティアとして、このイベントを運営される方々のサポートをする。そして、その活動の一環として、この「こもろまん」の制作も行うのである。今年も「こもろ・日盛俳句祭」に呼んでいただけることになり、もちろん、かわら版『こもろまん』も発行する。今年も引き続いだ、皆様のもとへ届けるようにする。大好評である、連続小説「すみれ」や、小諸滞在中に関連した詩を詠む「ここで俳句」など、見どころは満載である。

わたし個人的に、小諸に訪れるのは二回目だが、ちょうど一年前に過ごしていた自分の姿が薄々と見える

全国各地から参加される皆様の数は増え、たくさんの異なる俳句に対する世界観が集まり、質の高い俳句が詠まれることとなつていて。わたしたちは今年度もボランティアとして、このイベントを運営される方々のサポートをする。そして、その活動の一環として、この「こもろまん」の制作も行うのである。今年も「こもろ・日盛俳句祭」に呼んでいただけることになり、もちろん、かわら版『こもろまん』も発行する。今年も引き続いだ、皆様のもとへ届けるようにする。大好評である、連続小説「すみれ」や、小諸滞在中に関連した詩を詠む「ここで俳句」など、見どころは満載である。

わたし個人的に、小諸に訪れるのは二回目だが、ちょうど一年前に過ごしていた自分の姿が薄々と見える  
ようで不思議な感覚である。去年は少し慌ただしかった。蝉の鳴き声も、冷えた麦茶の味も、あの空の色も全部に時間が経つていて、少し懐かしいが、全部が新しいのだ。わたしたちの研究室もメンバーが大きくかわり、去年とは違った記事が期待できそうである。もちろん、今年卒業したメンバーも訪れるようだ。

また、加藤文俊先生が「カレー・キヤラバン」を開催する。カレー・キヤラバンでは、日本中、世界中のいろんなまちへ出かけ、その場所で手に入れた材料と、その場所に居合わせた人々の知恵をまぜあわせ、カレーをつくる。通りすがりの人も大歓迎である。ぜひ、みんなでカレーを食べて、盛り上がろう。（廣野）

## 今年もります、こもろまん



2012年  
(平成24年)  
7月27日  
金曜日

こもろまん編集部

発行所: 小諸市民会館  
komoroman@vanotica.net

第十二号

### 道中記

～湘南から小諸へ～



湘南台駅西口に集合した同乗者三人と、自分を含めた人数分の大荷物を積んで、横浜ナンバーの真っ黒なミニクーパーは、小諸へ向けて出発した。小気味良い音楽をかけて、横浜町田ICから東名へ。普段あまり自分の運転で高速に乗ることはないと内心緊張していたが、乗ってしまえばどうつてことない。人ごみと同様、流れに身を任せただけだ。そ

ロマン小説 第十二話  
**すみれ**

日差しの強さにも慣れてきた。都会で過ごしていた日々に比べると、自然にあふれた景色が夏という季節を引きたてているような感じがある。明日からは高校最後の夏休みが始まる。この道もあとどれくらい歩くのだろうか。

学校ではみんなキャンプと夏休みの話でいつも以上に盛り上がりがついている。そこに先生が現れ、夏休み最後のホームルームが始まった。ざわつきがおさまらない教室で先生が話を始める。聞いていない人も気にせず先生は夏休みに入る前の連絡事項を伝えていく。連絡も一通り終わつた頃先生は一度咳ばらいをして全員

に呼び掛けるように話し始めた。「みんなに一つだけ宿題を出したいと思う。高校最後の夏休み、大学で東京に行くものもいるかもしれない。だからこそ家族との会話を大切にしてほしい。そこで、みんなには自分の名前の由来を聞いてきて欲しいと思う。名前には親から子への想いが詰まっている。これからも大切にしてほしいものだから、みんなには自分の名前にどんな想いが込められているか知つていて欲しいんだ。帰り道、道端に咲く花を見ながら名前について考えた。母のすみれ、妹の葵、そして百合という自分の名前。そこにはどのようない意味が込められているのか。夏の日差しに照らされた花を見て少しだけ想いを巡らせてみた。

んなことを考えながら、東京ICで東名を降り、環八通りへ。  
環八通りは、平日にも関わらず、混雑していた。これは同乗者の眠気を誘つたようで、気だるい雰囲気が車内に漂う。その時、渋滞に苛立つ運転席の父親と、それをなだめる助手席の母親と、うとうとしている後部座席の僕ら兄妹、という光景が蘇つた。今では自分が運転席に座っていて、アクセルを踏んではゆるめている。なんだか歳を取つた気がしたが、視界の左隅に初心者マークが映り、現実に引き戻される。

出発から到着まで、約六時間の長旅。それなりの疲労感は残るが、達成感や充足感にも似ている。愉快な同乗者と、ご機嫌な音楽と、ミニクーパーで、素敵なドライブをきっかけとした。（青山）

環八通りを抜けて、練馬ICから関越道へ。進めば進むほど、緑が増えしていく。環八通りでの気だるさが嘘のようで、気分が高ぶつくる。途中、高坂SAで一休みしつつ、藤岡ICで上信越道へ。横川SAで釜飯を食べ、長いトンネルを何本も通り、佐久小諸JCTで上信越道から降りる。いよいよ、目的地は目と鼻の先。

環八通りを抜けて、練馬ICから関越道へ。進めば進むほど、緑が増えていく。環八通りでの気だるさが嘘のようで、気分が高ぶつくる。途中、高坂SAで一休みしつつ、藤岡ICで上信越道へ。横川SAで釜飯を食べ、長いトンネルを何本も通り、佐久小諸JCTで上信越道から降りる。いよいよ、目的地は目と鼻の先。



長かつた高速から降り、ようやく佐久平駅に到着した。駅の周辺は大きな建物ばかりで、車の交通量もとても多く、私の日常とはあまり変わらない町並みだと感じた。佐久平駅からはタクシーに乗って小諸市民会館へ向かうことにした。外を眺めていると、駅から離れていくにつれ、建物の大きさや高さが変わつて行く。と同時に、緑が増えていることに気付く。

市民会館から、今回お世話になる与良館へは車で向かった。与良館の外観に惚れ惚れしながら中にお邪魔すると、外観だけではなく建物の中

## 小諸の散歩道

も、江戸時代から維持していると聞いて納得できる落ち着きと安心感があった。

ことが出来た。家や道に咲いている花が多いこと、川の流れが澄んでいること、そして出会った人たちがとても親切に話をしてくれたこと。どれも自分の足で歩かなくては気付けなかつたことだ。

景色を作っているのは自然だけではない。人の手によって町並みは作られ、まちは形作られていく。人と景色の醸し出す雰囲気は似ていると、小諸での散歩道を歩きながら考えていた。(竹下)



### 場を成すもの

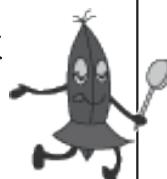
皆さんは与良館をご存知だろうか? ここは旧松屋(江戸時代漆器屋、その後家具問屋)を整備した地域交流の拠点施設。可愛いあさがお柄の暖簾をくぐると、笑顔で与良館のお母さんたちが私たちを迎えてくれた。『虚子の散歩道』を薦めて頂いたので、散歩道を歩きながら「澤の家」まで歩くことにした。到着からようやく初めて、自分の足で小諸を歩くことに気付く。途中、犬の散歩をしていた女性に道を教えて頂いた。トンネルを越えてから澤の家までの景色の、空の碧さと林の緑がとても綺麗だった。

車でなく自分の足で歩くことで、まちの様子を自分からの視点で見る

玉で彩られており、ここ空間だけ外とは切り離されているように感じられ、違う時代にいるかのような雰囲気が味わえる。大学生活で慌ただしい時間を過ごしており少しばかり疲れを感じていた私だが、畳に腰を下ろし、のんびりと外から入る風に揺れる紙風船を眺めていると、疲れがだんだんと癒された。

台所からは夕飯の準備の音が聞こえてくる。横では、扇風機が私たちを涼めようと、ブーンという音を鳴らして頑張っていた。そしてその音に、与良館に休みに来たおじさんた

## カレー・キヤラバンが 小諸にやつてきた!



与良館のとなりに、工具を片手に額に汗を浮かべ、なにやら奮闘している姿が見える。高さ三十センチほどのスチール缶と植木鉢、金網などを組み合わせ、数時間かけてできあがつたのは、なんと自家製のタンドール(インド料理などで使われる円筒形の窯窓型オーブン)だ。

「その場所で調達した食材と、その場所に居合わせた人々の知恵をまぜあわせてカレーをつくる」カレー・キヤラバンが、小諸のまちにやつってきた。今までスタートしたこの活動は、これまで訪れた東京都京島や新潟県上古町を含め

ちの賑やかな声が合わざる。静かなわけではないが、どこか安心を与える音たち。まるで時間が止まつているかのような穏やかな「場」がここにはあった。

是非、あなたも与良館に癒されに来ませんか。(田中)

は今回が四度目となる。メンバーでパブリックアーティストの木村健世さんは意気込みについて、「できるだけもたないようにしています。僕らはアマチュアで、意気込めばおいしいものができるとは限らないのです(笑)。ただ、声をかけてくださる方とたくさんお話をしながら、おいしいカレーを作りたいですね。」と話しました。

本日同じ場所で、カレーづくりはゆっくりとはじまります。スペイスが香ってきたら、覗いてみてください。乞うご期待!(丸本)